

2017 年度 ASNET スタディ・ツアー

作成者：古谷 創

日程

日時：2018 年 3 月 1・2 日（1 泊 2 日）

参加者：16 名＋大澤肇さん

1 日目

8：40～新宿駅集合、高速バスに乗車

9：10 出発（＊）

10：50～11：10 ふたば 双葉SA でトイレ休憩

12：00～13：00 すわこ 諏訪湖SA で昼食

14：00～15：50 いなし しんとくかん いさわしゅうじ 伊那市で進徳館・伊澤修二生家（工事中）・
たかとおじょうしこうえん たかとおまちれきしはくぶつかん 高遠城跡公園・高遠町歴史博物館を見学

17：00 しんしゅうこうきょう やど つるまきそう 宿泊所（信州公共の宿 鶴巻荘）着・懇親会

18：30 夕食

20：30～23：20 懇親会（一次会）

* 車中『まんもうかいたく しんじつーこくさくいみん じつぞう ひげき まんもうかいたくへいわきねんかん 満蒙開拓の真実―国策移民の実像と悲劇―』（満蒙開拓平和記念館
制作）、『やまもとじしやう ぼうきやう かね まんもうかいたくだん らくじつ やまだひさこ 山本慈昭 望郷の鐘 満蒙開拓団の落日』（山田火砂子監
督、2014 年）を視聴した。

2 日目

9：00 鶴巻荘発

9：30～11：15 満蒙開拓平和記念館を見学

12：20～13：20 諏訪湖 SA で昼食

14：45～15：05 だんごうざか 談合坂SA でトイレ休憩

16：00 新宿駅到着・解散

スタディ・ツアー参加者名簿

名簿	所属
村田雄二郎	東京大学大学院総合文化研究科教授・ASNET 兼任教員
東家友子	大学院総合文化研究科 博士課程
サラントヤ	大学院総合文化研究科 博士課程
山口早苗	大学院総合文化研究科 博士課程
楊力	大学院総合文化研究科 博士課程
宋舒揚	大学院総合文化研究科 博士課程
陳希	大学院総合文化研究科 博士課程
洪龍日	大学院総合文化研究科 博士課程
畔柳千明	大学院総合文化研究科 博士課程
劉和佳	大学院総合文化研究科 修士課程
曾永輝	大学院総合文化研究科 外国人研究生
梁晨	大学院総合文化研究科 外国人研究生
盧華	大学院総合文化研究科 特別聴講学生
李琳	大学院総合文化研究科 特別研究学生
蘇青	大学院総合文化研究科 特別研究学生
李俊儒	大学院総合文化研究科 外国人研究生
徐莎莎	大学院総合文化研究科 大学院研究生
青山治世(OB)	亜細亜大学国際関係学部国際関係学科准教授
関智英(OB)	日本学術振興会 特別研究員 P D
古谷創(OB)	一般財団法人霞山会 東亜学院日本語学校 非常勤講師
宋声泉	大学院総合文化研究科 外国人研究員(北京郵電大学中文系副教授)

計 21 名

2018年3月1・2日にASNETスタディ・ツアーに参加した。一日目は、朝新宿を出発し、午後は長野県伊那市に到着後、高遠城址公園を散策した。城址公園周辺には、高遠町歴史博物館があり、博物館では高遠城の構造について学芸員の方に説明していただいた。博物館を見学後、阿智村にある宿泊施設へ向かい、一日目の行程は終了した。

二日目は、宿泊施設から車で十分ほどの満蒙開拓平和記念館を見学した。



左：施設の方から説明を受ける様子



右：案内して下さった

ボランティアガイドの方

記念館内では、ガイドの方が展示資料を詳細に説明して下さった。中でも当時の国策推進のためのポスターや、開拓団の方が満洲から持ち帰った農具などが展示してあり、非常に興味深く感じた。施設内では、開拓団として参加された方のインタビューのほか、日本人残留孤児を育てた養母の方の証言も聞くことができ、満蒙開拓団について理解を深めることができた。記念館の近くには、自身が開拓団に参加し、日本人残留孤児の肉親捜しに尽力した山本慈昭氏の長岳寺もあり、こちらも併せて参観することができた。二日目は、記念館を見学後、バスで帰路につき、スタディ・ツアーは終了した。



左：集合写真（記念館正面）

スタディツアー・長野県那智村

宋舒揚（地域文化研究専攻博士課程）

満蒙開拓団と中国残留孤児という言葉は初めて生で触れたのは、国文学研究資料館主催の研修のときであった。ダンボールにまとめられた、とある残留孤児関係組織のアーカイブズで、中国からの手紙がたくさん入っていた。封筒を一つ開けてみたら、小さい頃から見慣れた赤罫線の便箋とやや崩れた手書きの中国語が目に入り、日本にいる家族を探してほしいという内容であった。うっすらと、一種の懐かしさを覚えた。



（長野の風景）

西へ向かう当日、東京は予告通り春の嵐が訪れた。窓越しの風景は長野県境に入ったとたんにながらりと変わった。溶けない白い雪と延々と続く黒い山、ここも雪国であることを語っており、春の気配すら感じさせなかった。



(満蒙開拓平和記念館の展示)

満蒙開拓平和記念館の展示はリアル性に満ちあふれ、満蒙開拓者の生活の細部まで復元した。しかし、最も印象に残ったのは、やはり当事者の証言であった。なかには、日本残留孤児を育った東北人女性の話があった。日中国交正常化の後、養女の親がすぐ見つかかり帰国したと。編集されたからなのか、錯覚なのか、その話にかすかな悲しさがにじみ出る感じさえあったが、彼女は当たり前かのように淡々と語り続けていた。

長年育った子が自分から永遠に離れていった。一方、広い意味では、それは加害者の(罪のない)子どもを育った、ともいえようか。その類のテーマなら、何年前か『秋雨』という鮮烈な映画がすでにあっただ。逆に、適切ではないことは承知するが、なぜ

か『白羅衫』という伝奇をも思い出した。話本小説から改編した（『趙氏孤児』のような）もので、加害者が被害者の子どもを育ち、その子が加害者に復讐するという物語であった。これもまた、あまりにもあっさりで、いわゆる現代人の感覚では理解しにくいものといわれた。（実際に新編本は「改良」され、より「人性」にかなうものになっている。）



（満蒙開拓平和記念館の前にて）

このスタディツアーの直後に、ちょうど駒場の一、二年生と北京に行く機会があった。北京大学の学生と交流して、北京（中国）を代表する文化遺産をともに見学した。そこで、若い彼らの書いた日誌を読んで、他者理解とは何か、真の和解とはなにかと久々に思った。

アイデンティティで困ることがあまりない私にとっては、留学生という身分をここまで実感できたのは初めてかもしれない。他国で自国の歴史を研究すること自体は、より深く考える価値があると思うようになった。外から違うまなざしで自国の歴史を見たい、という締めくくりだけでは足りない。歴史の「現場」をもっと体感しないといけない。そして歴史になろうとする「いま」をもっと関心の目を向けないといけない。その「感覚」の大切さは、今回のスタディツアーを通してあらためて得られた。

2018年3月2日、私たち村田ゼミグループは、長野県阿智村にある満蒙開拓平和祈念館を訪ねた。前日長野へ向かうバスの中で、中国残留孤児の肉親探しに尽力し「中国残留孤児の父」と呼ばれた実在の人物・山本慈昭の波瀾万丈な人生を映画化したDVD『望郷の鐘』を鑑賞した。満洲で終戦を迎えた日本人については、かつてなかにし礼の小説『赤い月』を読んだことがあり、主人公である波子の壮絶な運命と生きるためには我が子も切り捨てんばかりの振る舞いと、赤い大地のイメージが重なって強烈な印象が残っていたが、今回見た『望郷の鐘』では、過酷な逃避行を続ける阿智郷の人々、とりわけ主人公である慈照さんの心の落ち着きが印象的で、赤い大地も家族の風景と結びつき郷愁を誘うイメージとして残った。様々な描き方があるなあと感じながら、記念館ではどう展示するのかという関心を持ちながら門をくぐった。

入館後、まずはセミナールームで挨拶や簡単な説明を受け、その後展示スペースに入った。通路にあったパンフレットの表紙に、「前事不忘、後事之師」というフレーズが印刷されていたことで、この記念館の基本理念を凡そ把握することができた。ボランティアガイドの林さんは、時代背景や展示物について、心を込めて丁寧に解説してくれた。序章でまず目についてのが、プロパガンダ・ポスターである。戦後没収対象となったポスターが村長によって135枚も保存されていたことに驚き、リアルタイムで収集し、国家の命令に背いてでも隠し持つことにした原村長の視点や意志の強さに心を打たれた。並べて展示されていた4点のポスターのうち、私が気になったポスターは、厚生省、財団法人職業協会の『労務動員—あつまれ油出繊維工業へ』である。平面的であるが、青と黒の色彩、モチーフの構成など、古賀春江の『窓外の化粧』を思い起こさせるようなシュールな雰囲気を感じた。この作品は作者不明であるが、恐らく当時活躍していた凶案家によるもので、作者は愛国心から描いたというより、デザインのよい秀作を作りたいと思っていたのではないかと感じた。当時は美術界も政治と深く関わっていたが、「お国のために」という思いの強さには個人差があったのだと思う。

長野県が満蒙開拓団の団員として全国最多数であったが、そのひとつの理由は土地の貧しさにあると従来から言われている。林さんもその点を指摘しながら、「それでも恐らくそれだけではないであろうし、他にどんな背景があるのか今後調べたいことだ」とおっしゃっていたことも印象に残った。ちょうど前の日に山口さんとそのことについて話したが、山口さんは「長野県は教育熱心で、教育者が政府への協力を呼び掛けた点に関係するのでは」ということを指摘していた。また、松本は軍都でもある。貧しさ以外の要因についても、その他上位他県、下位の県などと比較しながら調べてみると更に理解が深まるのではないかと思う。

全体説明終了後、林さんから山本慈照さんが住職を務め、『望郷の鐘』にも登場した長岳寺が、記念館のすぐそばにあると教えていただき、足を運んだ。想像よりもこぢんまりとしたお寺であったが、落ち着いたの優しい場所だと感じた。堂内に入る時間がなかったことが心残りである。そのうち、家族と一緒に満天の星の観察も兼ねて、再び阿智村を、満蒙開拓平和記念館を訪れたい。 (終)



報告書

畔柳千明（地域博士課程）

2018年3月1・2日にかけて開催された2017年度ASNETスタディ・ツアーに参加した。長野県に行くのはこれが初めてで、満蒙開拓団についても疎く、一日目の事前学習にはとても助けられた。

二日目の最初の訪問先が満蒙開拓平和記念館であった。長野は全国で最多の開拓団員を送出した県であり、さらに下伊那・飯田は県内で最多の団員を出した地域であることは記念館で初めて知った。展示解説では貧困だけが送出の原動力となったわけではないと強調しておられたのが深く印象に残った。移民は本人の「希望」に基づいてなされただろうが、その希望を抱く背景として、展示されていたポスターはその一端を伝えるものであったと思う。後述の「望郷の詩碑」には「大陸に命をかけた」とあるが、そこまでの覚悟で臨んだ人は、実際は少なかったものと想像された。また展示してあった上着は兎の毛こそほんの少し使っていたが裏地が羊毛ではシベリアでさぞ寒かったろうと思った。

記念館見学後には、近くの長岳寺を歩いた。自身も開拓団に加わり戦後は残留孤児支援に取り組んだ山本慈昭氏が住職を務めた寺であり、急な階段を上ると、決して広くない境内に、様々な記念碑がところ狭しと並んでいるのが不思議な印象であった。この場所がいくつかの記念すべき事件の舞台となっていること、すなわち1200年の歴史ある寺院であると同時に、信玄公遺体火葬の地（一日目に訪れた武田氏ゆかりの高遠城が思い起こされた）、作家森田草平の終焉の地である等々すぐに分かる。

長岳寺（阿智村）左：「森田草平終焉の地」の碑。右：「望郷の詩碑」「望郷の鐘」「鐘楼」それぞれ由来が記されている。境内にはほかにも山本氏の像、「武田信玄火葬の地」、「沙羅双樹の木」などの記念碑・ガイドがあった。



山本氏は1937年に住職になり、1990年に亡くなったということであるから、恐らく、これらの記念碑の多くは設置にあたって彼と関係があるのであろう。この寺を、満蒙開拓団の記憶の場として、この地域で起こった諸々の出来事と地続きのものとして残そうとする意志さえ感じられた。

このスタディ・ツアーは10年以上ほぼ毎年行われてきた村田ゼミのゼミ合宿最終回でもあり、私自身は初参加であったが、大学をめぐる環境が大きく変化する中で続けられてきたという事には感動すら覚えた。村田先生、ゼミ生のみなさま、旅先でお世話になった方々のおかげで大変楽しく過ごしたことは言うまでもない。特に世話役の古谷さん、山口さんに改めて心から感謝申し上げたい。

満蒙開拓平和記念館見学感想

1. 日本帝国の満蒙開拓と「間島」



まず、自分は「満州国」時期の「間島省」にあたる今日の延辺朝鮮族自治州出身なので、記念館を訪れる前からの個人的な関心ごとは、日本帝国の満蒙開拓事業と延辺の間に何らかの関係あるか、ということであった。しかし、記念館に展示されている「満蒙開拓民入植図」を見る限り、ほぼその関連性を見いだすことができない。その主な理由として、間島への朝鮮人の移住は自発的なケースが多く、満蒙開拓事業が本格化する1931年以前にすでに朝鮮人移民が間島の多くの農耕地を開発し、生活を営んでいたため、日本からの開拓民が定着できる土地が少なかったこと、などが挙げられよう。

2. 「日本帝国にとっての満州は何だったか」という問いかけ、そして残留孤児の諸事情

- ① 記念館に展示されている満州移民を訴えるポスターや映像資料を見ながら、ふと「当時の日本帝国にとって満州とは何だったか」という疑問が、「微かな回答」と交わって頭の中に浮かび上がってくる経験をした。
- ② 長野に向かうバスの中で視聴した映画、『山本慈昭 望郷の鐘 満蒙開拓団の落日』（山田火砂子監督、2014年）。「中国残留孤児の父」と呼ばれる主人公の山本慈昭の「国家に尽くした日本国民は加害者であって被害者であった」という独白から、概ね記念館の志向する「歴史認識」を察することができた。彼（彼女）らは日中の歴史の狭間で翻弄された戦争あるいは日本帝国の被害者であるだけでなく、同時にその歴史の大きなうねりに柔軟でしなやかに対応し、日本や中国というナショナルな領域を飛び越え、トランスナショナルな生活世界やアイデンティティを切り拓いてきた人たちでもある。そうした人たちが語り続けてきた真実な歴史だったからこそ、国家の領域を越え、記念館を訪れる人々に感銘を与えるのではないだろうか。阿智村の歴史（認識）は、未だ国際政治

村田ゼミ・長野県スターディツアー
2018年3月2日

洪 龍日
東京大学・総合文化研究科・地域文化研究 (D2)

や国家関係に翻弄され、国粹主義に流されがちな少なくない「日本帝国関係
国」の国民一般にも広く共有されるべき大切な遺産である。

修学旅行有感

李琳

参观长野县的“满蒙开拓平和纪念馆”是我一直以来的梦想。通过这次的修学旅行，我深刻地意识到了殖民地问题中蕴含的道德复杂性。一方面，绝大多数移民去满蒙的日本民众在本国中属于贫苦的劳动阶级，教育程度一般，以农业为生。农村人口的快速增长和农村土地的缺乏，使得许多日本农民过着饥寒交迫的生活。面对这一现状，日本殖民政府以“如果你搬往满洲，就可以立刻获得大片土地、过上富足的生活”的话语鼓励日本农民移民满蒙。在这一历史背景中，移民满蒙成为了这些日本农民发家致富的希望。从 1937 年至 1945 年，总计有 27 万日本人以农业移民的形式定居满洲。这些普通日本民众为了解决温饱、养家糊口而渡满，我非常理解他们为何做出这样的选择。但另一方面，这些日本移民在满蒙获得的土地往往是日本政府从当地农民手中强取豪夺而来的。有多少日本农民获得了土地，便意味着有多少满洲的农民失去了土地。当日本移民在新大陆找到了新生的希望时，满蒙本土的无数百姓却失去了谋生的工具和生存的可能。为了养家糊口，满蒙本土的农民时常充当日本移民的苦力，通过帮后者干体力活来赚钱。日本的农民也罢，满蒙的农民也好，都属于同一个阶级，都被资本家剥削、被政治家操纵。遗憾的是，他们非但未能跨越国籍的界限、并肩战斗，反而在日本帝国主义的历史背景下自相残杀。在我看来，没有什么比底层人民之间的自相残杀更让人痛心的事情。一直到今天为止，类似的现象仍在不断发生。各国的政治家利用民族主义情绪挑动本国人民对他国人民的仇恨和敌意。但被压迫的各国人民之间的共同点不断被淡化，使得跨越国境的联盟与合作难以实现。

殖民地问题中蕴含的道德复杂性也体现在日本移民在战时及战后的命运上。虽然移民满蒙的日本民众构成了日本殖民史的重要组成部分，但他们和制订侵略方针的日本政客、手持武器杀害无辜平民的日本军人并不一样。大部分日本移民并没有直接参与对中国人的屠杀，因此他们虽然推动了日本的殖民扩张，但他们要为日本帝国主义负多少责任，并不是一个容易回答的问题。此外，日本宣布战败之后，日本政府没有一个系统性的帮助日本移民回国的方针，导致大批日本人被困在已经解放了的海外。以满洲为例，1945 年 8 月苏联进攻满洲之后，许多日本人因为无法逃离满洲而自杀身亡。被活捉的日本人中有一部

分男性被强行押送去西伯利亚的收容所，多年之后才被释放。而留在中国的日本人，不仅要承受当地人的排挤和歧视，在文革期间更是受到了诸多压迫。1974年中日恢复邦交之后，许多日本人选择回到日本。但其中许多人——尤其是中国残留孤儿——既无法融入日本的文化、也找不到合适的工作，生活份外艰难。这些中国残留日本人一生颠沛流离，在1945年日本战败之时被日本政府抛弃，在1945年至1970年代之间遭到中国社会直接或间接的歧视，而在1980年代回到日本之后被日本社会孤立。虽然这些日本移民是日本帝国主义的重要组成部分，但他们在历史转型的过程中，由于无权无势、无依无靠，往往承受了比日本军国主义战犯更多的不幸。日本移民的悲惨命运，使得“谁是加害者？谁是受害者？”这个问题的答案，变得异常复杂。

通过参观长野县的“满蒙开拓平和纪念馆”，我对于殖民地研究中蕴含的道德复杂性有了更深切的思考。非常感谢村田老师和古村先生组织这次活动！您们辛苦了！



満蒙開拓平和記念館見学感想

1. 日本帝国の満蒙開拓と「間島」



まず、自分は「満州国」時期の「間島省」にあたる今日の延辺朝鮮族自治州出身なので、記念館を訪れる前からの個人的な関心ごとは、日本帝国の満蒙開拓事業と延辺の間に何らかの関係あるか、ということであった。しかし、記念館に展示されている「満蒙開拓民入植図」を見る限り、ほぼその関連性を見いだすことができない。その主な理由として、間島への朝鮮人の移住は自発的なケースが多く、満蒙開拓事業が本格化する1931年以前にすでに朝鮮人移民が間島の多くの農耕地を開発し、生活を営んでいたため、日本からの開拓民が定着できる土地が少なかったこと、などが挙げられよう。

2. 「日本帝国にとっての満州は何だったか」という問いかけ、そして残留孤児の諸事情

- ① 記念館に展示されている満州移民を訴えるポスターや映像資料を見ながら、ふと「当時の日本帝国にとって満州とは何だったか」という疑問が、「微かな回答」と交わって頭の中に浮かび上がってくる経験をした。
- ② 長野に向かうバスの中で視聴した映画、『山本慈昭 望郷の鐘 満蒙開拓団の落日』（山田火砂子監督、2014年）。「中国残留孤児の父」と呼ばれる主人公の山本慈昭の「国家に尽くした日本国民は加害者であって被害者であった」という独白から、概ね記念館の志向する「歴史認識」を察することができた。彼（彼女）らは日中の歴史の狭間で翻弄された戦争あるいは日本帝国の被害者であるだけでなく、同時にその歴史の大きなうねりに柔軟でしなやかに対応し、日本や中国というナショナルな領域を飛び越え、トランスナショナルな生活世界やアイデンティティを切り拓いてきた人たちでもある。そうした人たちが語り続けてきた真実な歴史だったからこそ、国家の領域を越え、記念館を訪れる人々に感銘を与えるのではないだろうか。阿智村の歴史（認識）は、未だ国際政治

2017年度ASNETスタディ・ツアー報告書

地域文化研究博士課程 楊力

2018年3月1日から2日にかけて長野でスタディ・ツアーに参加し、大変充実した二日間を過ごした。

出発の前日に、天気は大荒れと予告されたため、心配でよく眠れなかったが、翌日の朝六時くらいに雨が上がり、気分も晴れるようになった。好天気に恵まれ、高速バスの社内から窓外の風景をずっと眺めていた。



山と森林



途中から雪景色に変わった

昼食は諏訪湖で取った。「桜鍋」というおいしそうな料理を見て思わず注文したが、「桜肉」は馬肉の別称だとわかってびっくりした。隣に座ったゼミの日本人先輩二人が馬肉の刺身を注文したが、さすがに試す勇気がなく定番の豚肉のしょうが焼きに変更した。中国の広東人は動物なら何でも食べられるという自慢げな伝説を聞いたことはあったが、この目で確かめることはなかった。今回は美味そうに生馬肉を食べている日本人を見て、同じ人類にしてもお肉に対する思いが違うだなと改めて食文化の面白みを感じた。



(牛鍋と勘違いしていた) 桜鍋のポスター



豚肉のしょうが焼き

午後は社内で映画『満蒙開拓の真実——国策移民の実相と悲劇』と『望郷の鐘』を観賞

し、伊那市で進徳館や高遠城跡公園と高遠町歴史博物館を見学した。日本の古民家は屋根がとても分厚くなんだろうと思いつつ、人を閉じる目的で作られた木製の檻を見て、これは鉄筋製ではないので簡単に破れるだろうと一層不思議感が増した。



分厚い屋根



木製の檻

二日目は満蒙開拓平和記念館を見学した。私は中国の江南地方（長三角地区）出身だったためか、東北地方に対して、文化も方言も親しみが覚えられないのであり、東北で暮らした日本人というとなおさら疎遠感だ。昔はテレビドラマ『大地の子』や、『小嬢多鶴』を見たことがあったが、中国近代史の勉強不足もあって、それらの物語を大きな歴史の脈絡で見ることができなかった。今回の見学をきっかけに、満蒙開拓団の歴史に触れることができたうえ、体験者の対談を見るによって、戦争の複雑さを感じた。戦争による被害は加害国の国民にも被害国の国民にも起きており、人間は自分の生き方や運命を決めるというより、時代に決められていたのではないかとしみじみ思った。



山に囲まれる満蒙開拓平和記念館



満蒙開拓団の歴史背景を解説

2017年度ASNETスタディ・ツアーについて

陳 希

2018.03.09

私は今回のASNETスタディ・ツアーに参加したことを大変良かったと思います。実は、私は日本留学が決まった時に、東京だけではなく、様々なところに行き、日本理解を深めようと思いました。しかし、実際留学生生活を始めたら、生活や学業が忙しいため、なかなか行く機会がなく、結局実現できませんでした。

その意味において、今回の学習旅行は私の夢を実現させる機会を与えてくれました。大変感謝しております。今回の学習旅行で、最も印象深かったのは、満蒙開拓平和記念館の見学でした。むろん、平和記念資料館について行く前にはある程度把握しておりましたが、実際に行くと、やはり想像以上に衝撃的でした。そして、そこで聞いたスタッフさんからの紹介も非常に詳しく大変興味深かったです。

多様なことを考えさせてくれました。それを通して、近代的戦争はどういったものであったか、またそれが一人一人の個人をどれだけ傷つけ、苦しめるものでありえるかを自分の「目」と「耳」で確認できました。また、戦争は人間あるいは人間集団のする行為とみなされる傾向もありましたが、今回のASNETスタディ・ツアーの勉強を通して、多くの人は主体的に戦争をするというより、戦争の中に巻き込まれ、呑み込まれたという事実を感じさせられました。

つまり、多くの人は戦争するのではなく、否応なく「戦争」に協力し、「戦争」を経験して生きるわけです。その意味で、近代的戦争とは「国民国家」間で戦うものであり、その主体は集団や国家である。それは「個」に対し絶対的、圧倒的な優位に立つという状況です。つまり、多くの個人は戦争の主体によって作られた状態に身を投げ出されるということなのです。

特に戦争の記憶が薄れていく中、近年上昇する東アジア諸国の緊張関係を考慮する際に、満蒙開拓団の重たい「戦争経験」を、どのように活かすことが重要な課題だと思えます。それを「日中戦争」乃至東アジアの諸国の戦争に照らして考えると、一国史を超えて「越境」し得る知的知恵と想像力に基づく「真」の知的交流と和解が必要となる。

つまり、異なる戦争をめぐる言説の間を「移動」することによって、現れてくる差異と誤解、そして諸国の間に横たわる重い過去に直視しながら、未来を展望することだと思う。そこに東アジアを考える知的教養と常に自分たちが背負っている「歴史的被拘束性」を相対化できる学問的探求が要請される。今回のスタディ・ツアーを通して、私は「越境」を追求することによって初めて獲得し得る「視差」に一步近づいたように感じました。

スタディツアー報告書（中国語）

東京大学 総合文化研究科 M1 劉和佳

在這次為期兩天的校外教學中，另我印象最深刻的就是「滿蒙開拓和平紀念館」。該紀念館中展示了許多珍貴的資料，例如重現當時滿蒙開拓團寓所的模型以及許多貴重書信。其中以中文寫成的殘留孤兒的書信更隱約地訴說著一個時代的悲劇。許多懷抱著希望前往新大陸發展的日本人在異鄉淪為「侵略者」，甚至在人生的最後都無法重訪家鄉懷抱。歷史學並只是存在於紙本上的空泛學問，她是藉由先民的血與淚所堆積出來的記憶。在參觀過滿蒙開拓和平紀念館後，我再次感受到歷史的複雜以及糾葛。看著擁有「中文姓氏」的「日本人」使用「中文」向山本慈昭先生訴說自己對「日本」的情懷，不難感受到書信中所夾帶著重層的歷史感情。

當時日本各地皆有許多人前往滿州發展，但唯獨長野縣的人數最多。長野縣移民人口最多的原因究竟為何？當然經濟因素是一個可以考慮的原因，不過當時處在經濟劣勢的並不只有長野一縣而已，長野縣人口流出的原因仍需要更進一步的研究。在經過這次的校外教學後，我對於「滿蒙開拓團」這塊被忽略於歷史洪流中的一片拼圖，有著初步的理解。雖然往後的人生道路或許不會再繼續走在史學的道路上，但在歷史學所學的對於人本的關懷，我想是我一輩子的財產，當天的所見所聞也將會銘記於心。



史-文-人：长野阿智村满蒙开拓团博物馆游记

卢华 华东师大思勉高研院-东大综合文化研究科联培博士生

略显寒冷的3月早春，在东京大学综合文化研究科村田老师研讨班的同仁们劳心组织下，在不到两天的时间里，我参加了一次小而精当的历史与人文之旅。从东京的大都市，驰车到隆冬刚褪、残雪依稀可见的长野县，一股人文气息扑面而来。除了直接体悟长野那悠久的历史文化（从战国时代的高远城开始），当地丰富的人文底蕴——尤其是孔子那五圣像——和教育传统也让我这个中华文化浸染下的学生惊叹。

地处日本本州中部，丘陵山地明显的长野县欠缺较好的经济资源与自然地利。经过村田老师的讲解，我才得知长野自然禀赋虽然不够，但是因祸得福的是长野士绅与民众得以专心一志，集中力量发展教育。从明治前后的进德馆到如今发达的现代学校教育系统，令人敬服。但是，除了教育提供的机会以外，长野县也有了悠久的移民传统。特殊的时代境遇下，这竟然成了部分长野老百姓的噩梦。二战时日本政府的国策需要、右翼分子的舆论与社会压力使得长野县成了所谓“满蒙开拓团”和“少年义勇团”政策的最大牺牲品。长野县被安排了最多数量的民众去中国的东北地方开拓、殖民。数以万计的长野县民不得不背井离乡，服务于二战日本的侵略国策。可惜，二战后期苏联出军东北，早已被削弱的关东军只顾自保，带着妻儿老小往南逃亡。可惜那些被扔在当地的少年义勇团和开拓的农民，饥寒交迫的逃亡之旅对渴望回乡的民众而言，却是永远回不到家乡的不归路。绝境之下，部分家庭甚至只得在托孤之后绝望自杀，永远留在了中国大陆！

阿智村的满蒙开拓团纪念博物馆的参观，更是提醒我们，过去可以被不断书写，却永远不能被遗忘。日本侵华战争中那湮没无闻的、被战时日本政府和关东军当做牺牲品的开拓团民众，就像中国那抗日战场上牺牲的千万军民故事，既需要史学家们的记录、民众的关注，也需要后人持续的反思。战后的复杂局势让活下的开拓团民众也难以返回家乡，邦交正常的中日已是快三十年后的事情。官僚的推诿、年代的久远与亲人失散带来的联系困难让很多民众无法立即返乡归国。跟只顾自己逃跑的关东军一样，那些曾经的好战分子和右翼人士，拥有更多资源和机会得以苟且，却没有得到应有的惩罚和制裁，命运的差异令人何其寒心？